

# [武蔵国分尼寺跡(府中市)]探訪レポート

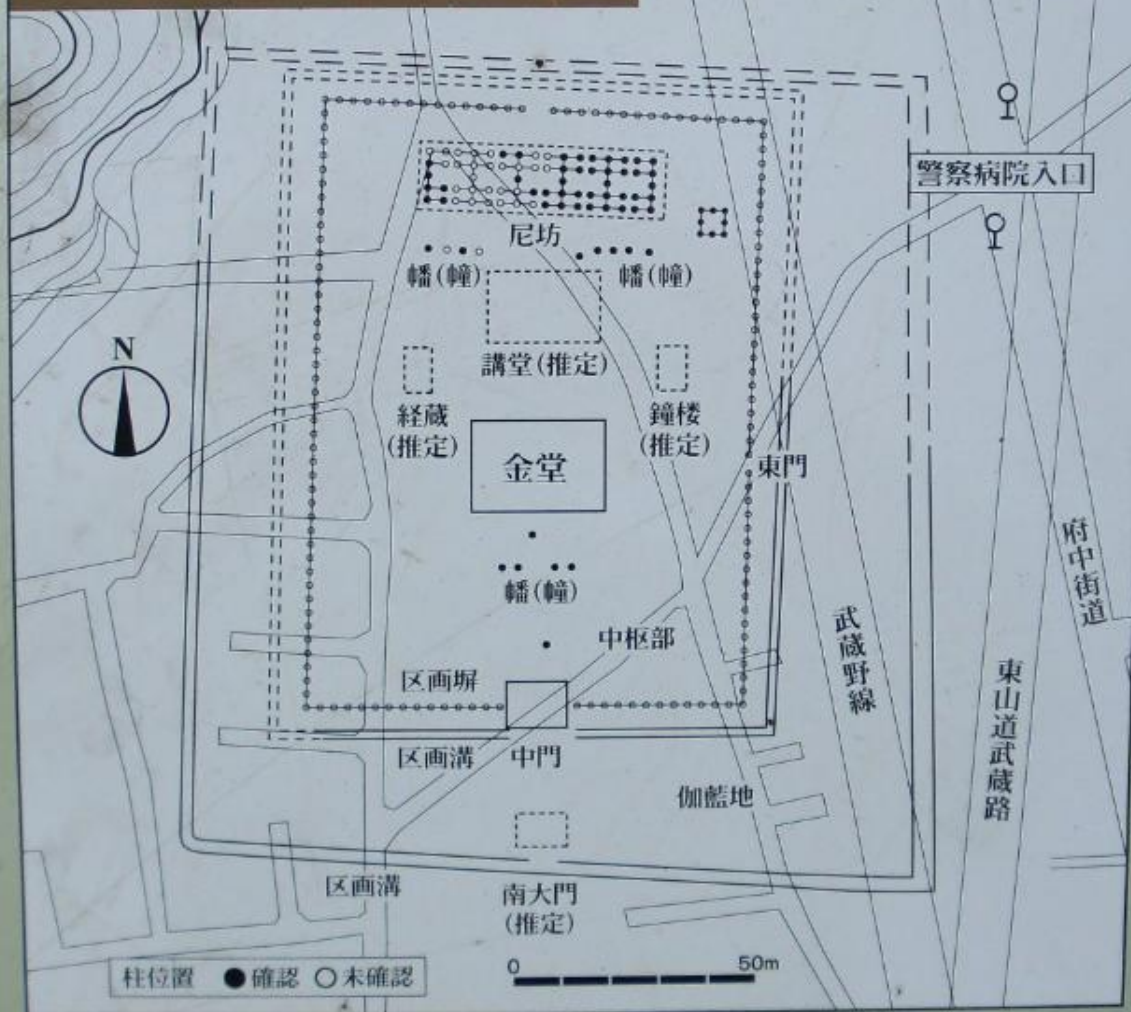
武蔵国分尼寺跡







# 主要遺構全体図



参考ホームページ

<http://mapbinder.com/Map/Japan/Tokyo/Kokubunjiishi/Kokubunniji/Kokubunniji.html>

正面に尼坊の基壇と礎石が表示されているが、道路によって二分されている





加藍の区画の塀が植栽や柱で表現されている



一部、塀が表示されている





塀の左手は伽藍の区画溝の表示



砂利部分が区画溝





# 尼寺跡中枢部北辺

尼寺伽藍地(寺域)の内の中門より内側の中枢部には金堂、講堂(未発見)、鐘楼(未発見)、経蔵(未発見)、尼坊などの主要建物が配置され、中門に取付く掘立柱扉と並行する素掘溝で長方形に区画される。規模は東西89.1m(300尺)、南北118.8m(400尺)と後述される。回廊を設け、中に尼坊までもも入れ、異なる配置は僧寺と同じである。

北面塼(SA4)は尼坊の北側柱列より9m北に並行している。中軸線との交点部分は開口していて、通用門(北門)があったものと想定できるが、その規模は不明である。北面塼の柱穴は武蔵野線の際まで14個が確認された。柱間は2.4m(8尺)、柱径25cm。柱穴掘方は一辺1.5~1.8mの長方形で、建替えはない。土塼か板塼か、あるいは土塼

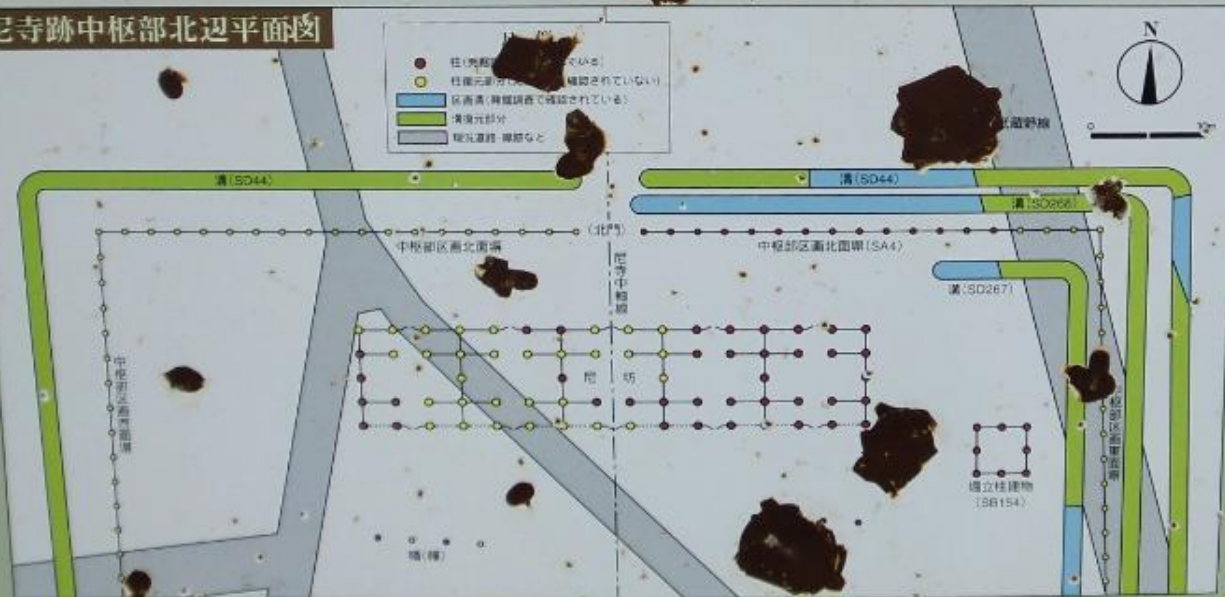
を葺いていたかどうかは不明である。参考として説明板を兼ねて板塼をここに表示した。

区画溝(SD44)は塼より4.6m離れて掘られている。上面幅1.5m、底面幅0.9m、深さ0.7mで、伽藍地(寺域)区画溝よりやや小規模である。

塼に近い内側(SD267)と外側(SD268)の「溝」は、大きな穴が繋がっている形態で、内側の溝が尼坊の北側部分にないことなどから、塼に直接伴うものではなく、塼を含む中枢部内建物の基礎工事に伴う用土を採取した跡(その後に瓦等の廃棄物を利用)の可能性が大きい。

なお、中軸線の西側は中近世の溝・土杭などが重なり、溝は確認されていない。

尼寺跡中枢部北辺平面図



中枢部区西北面塼(中央)西から手前(西側)は中近世における土地利用により滅失



中枢部区西北面塼(中央)北から奥は尼坊跡東表 昭和53年(1978)上下共

尼坊の基壇と礎石が表示されているが、道路によって二分されている











尼坊の基壇と礎石の表示







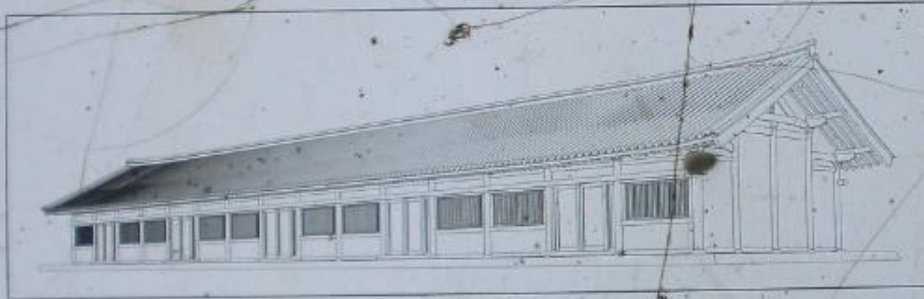




# 尼坊跡

尼僧の住まい。中軸線上にのっており、講堂の背後に建てられた。  
 桁行15間約44.5m、梁行4間約8.9mの東西棟礎石建物。本瓦葺、切妻造。柱の下にあった礎石70個は全て失われたが、基礎工事の礎石据付掘方が規則正しく並んでいる。半数弱は未確認だが、全ての柱位置が復元できる。掘方は一辺1.3~1.7mの方形で、深さ0.7mほど掘り込み、版築（厚さ5~15cmの土を1層ずつ突き固めては重ねる工法）を行う。上部には5~15cm大の川原石を多数入れ礎石を安定させた。建物は桁行3間分を1単位として、間口・奥行共約8.9m（30尺）四方の同じ大きさ、同じ構造の5房からなる。各房の間取りは不明だが、法隆寺東室（奈良県）など現存する古代の僧坊を参考として、房境は梁行4間分を壁で仕切って各房を独立した居室とみなし、各房中央間の両端を扉とし、扉の両端は蓮子窓とするなど、下図のように

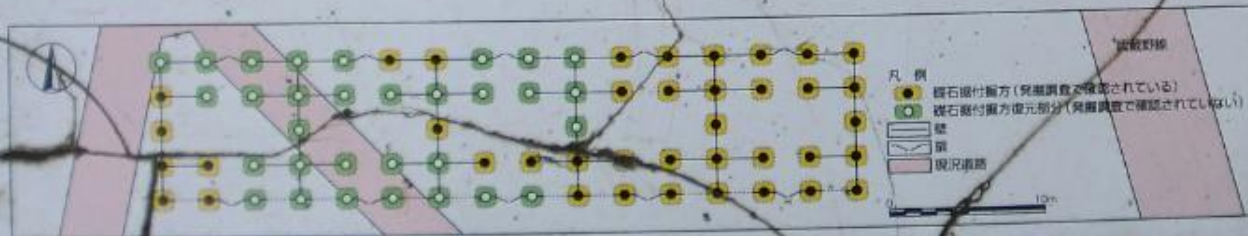
想定した。  
 房内は扉、壁などで仕切られて複数の室があり、昼間の居住、勉強の間や寝室などの場であったと考えられる。土間か床張りかは不明だが、土間とすればテーブル、椅子、ベッドの生活となる。  
 尼僧の定員は天平13年（741）の国分寺建立の詔に10人と規定されている。その後変化もあったが、僧寺の僧坊が尼坊と同じ規模の建物2棟で、僧侶の定員が20人（同詔）とされたのに対応する。こうした正規の尼僧の他に、修行中の尼僧や召使などが従事して、共同生活を行っていた。  
 整備にあたり、礎石は往時と同じ多摩川産の石（チャート・砂岩）を新たに据えた。また壁となる部分は黒レンガで表現した。



尼坊外觀イメージ



昭和39年（1964）の東半部発露状況 北から



尼坊平面図



掘方の版築層











手前は掘立柱建物跡







ほつ たて ばし たて もの あと

# 掘立柱建物跡 (SB154)

東西2間4.5m、南北2間4.8mとほぼ方形の建物。柱穴掘方は長方形で、短辺0.8~1.0m、長辺1.2~1.5m、深さ1mほどと大きい。柱の痕跡は径25cm。整備にあたっては、建替後の柱位置を表示した。

SB151A掘立柱建物（東西推定4.8m、南北4.8m）、SB151B掘立柱建物（東西推定5.1m、南北6m）と重複しており、出土遺物と埋土によりSB154が最も古く、創建期に位置付けられる。3棟共<sup>ニ坊</sup>尼坊に近接していて、<sup>ニ坊</sup>尼寺伽藍とほぼ同じ方位をとることから、<sup>ニ坊</sup>尼坊に付属する施設と考えられる。



掘立柱建物跡周辺遺構平面図



柱(木杭)は斜めに立つ幢竿跡の表示











# 斜めに立つ幢竿跡

尼坊前面において、中軸線をはさんで東西に竿跡が並んで発見された。このうちの東側一方を表示している。4本の柱の間隔は約2.4mで、柱列の向きはおおむね尼坊に合う。柱穴の掘方は一辺1.5～1.8mと大きい長方形で、深さは南側が0.3mほど浅いが、北側は1.2mと深く、斜めに掘られている。柱径は30cm程度と推定される。いずれも柱の抜き取り痕跡が斜めに観察されたので、約54度前後で斜めに立っていたものと考えられるが、その理由はよくわかっていない。回廊をもたない特異な伽藍配置の本寺にあって、この位置から南側がいわば回廊内にあたるので、荘厳な仏教空間をイメージするため白色系の砂利敷とした。



この辺りに講堂があったらしい/またその左手に経蔵、右手に鐘楼があったという







# 講堂想定地

講堂は經典の講義などを行う建物。往時の規模に復元された金堂基壇と尼坊との間は広く空白地となっているが、中興時には講堂が、その東西には鐘樓と經藏が配置されていたと想定される。中興後、近年の宅地造成による攪乱が原因で未確認となっている。

講堂の基壇規模は僧寺にならって金堂より2割ほど小さく想定し、東西22m(74尺)、南北15.2m(51尺)とした。なお、建物外観は唐招提寺講堂などを参考に想定した。鐘樓は時刻を告げる鐘を釣り下げた建物、經藏は大切な經巻をしまっておく建物で、いずれも二階建て、同じ大きさの建物を左右対称に置いた。

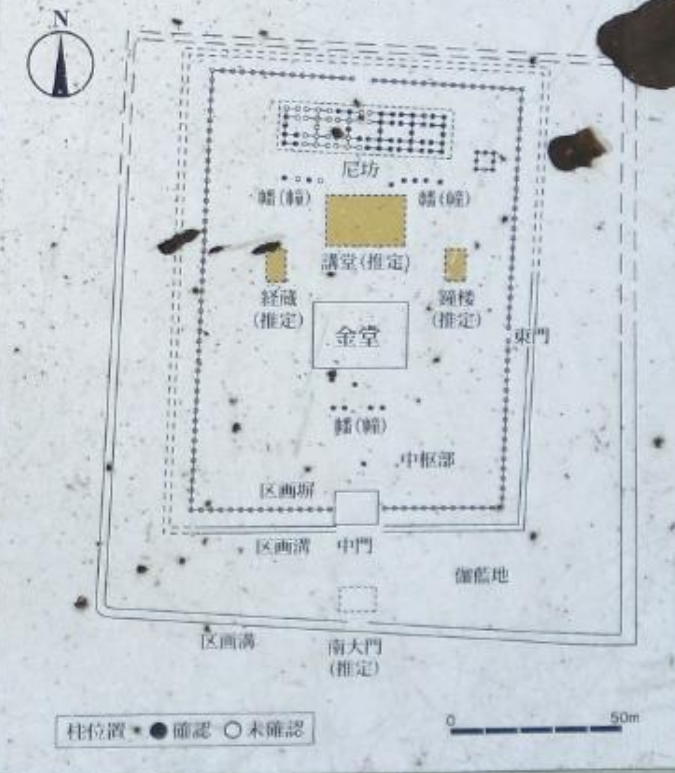
規模は僧寺の鐘樓跡と同じく間口(南北)7.2m(24尺)、奥行(東西)4.8m(16尺)として図のように想定した。

鐘樓・經藏の位置については、僧寺における想定とあわせ、東を鐘樓と仮定した。



講堂外観イメージ図

## 伽藍配置図



講堂跡から金堂跡を見る





金堂の基壇



西から金堂跡を見る





中門跡付近から金堂跡方向を見る



この太い木杭は巨大な幢竿跡







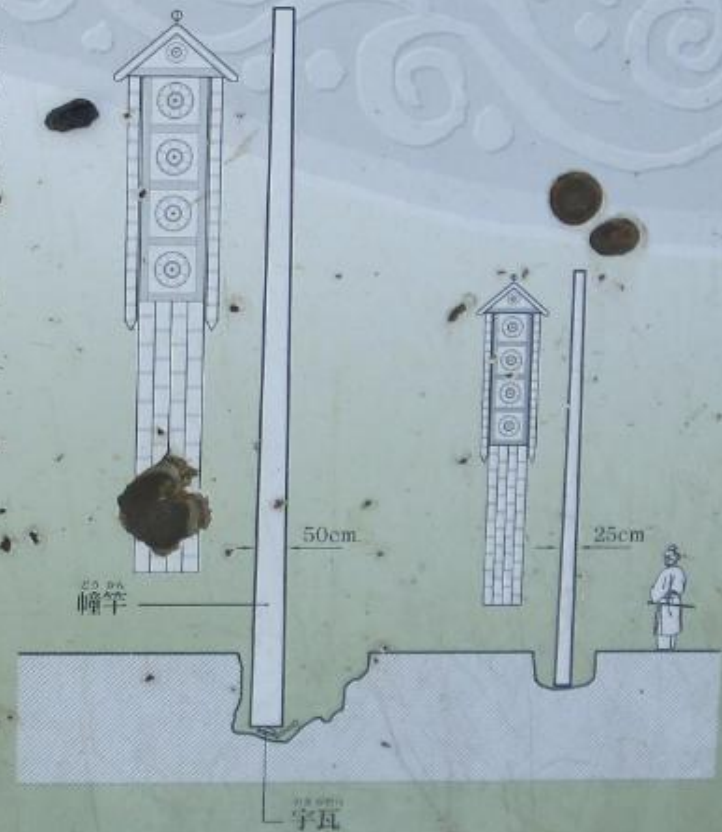
# ど かん 巨大な幢竿跡

柱穴の規模は1.9m×2.1m、深さは1.6mで、底は平らでなく、東側は一段浅く、南側はスロープ状となり、北西部が最も深い。その北側の壁はほぼ垂直で、ここに径50cmの柱を立てた。通常の幢を懸ける柱が25cm程度であったのに比べるとこの柱は相当高く、大型の幢が懸けられていた可能性がある。柱の根元には沈み込み防止のため、4枚の宇瓦が礎盤として敷かれていた。柱の真下には、凸面を上にして2枚重ね、南側と西側にはその2枚を抑えるように斜めに置いてあった。柱直下の2枚は重さのたがひ細かく割れていた。

これらの瓦は武蔵国分寺期創建期の瓦を多量に生産したことで知られる南比企窯跡群の久保1号瓦窯(埼玉県鳩山町)で焼かれたものであることがわかっている。(写真) これらから、尼寺創建時期の中門や金堂の軒先を飾った経緯瓦の一端を知ることができる。



礎盤として使われた  
偏行唐草文宇瓦



金堂前面に立てられた幢竿跡







# 金堂前面に立てられた<sup>どう</sup> <sup>かん</sup>幢竿跡

のぼり旗を懸け吊るした高竿の跡と考えられる掘立柱式の柱穴。旗を「<sup>どうばん</sup>幢幡」あるいは「<sup>ばん</sup>幡」といい、高竿を「<sup>どうかん</sup>幢竿」あるいは「<sup>どう</sup>幢」という。

尼寺中樞部では、金堂基壇の南端より12m離れた位置に、東西に4本の柱穴が並んで発見された。中央は参道のため5mほど開いている。柱を埋めるための穴は1辺1.2m～1.5m、深さ0.6mほどの長方形で、柱径は25cm。柱の高さは6mあまりとなる金堂の軒先の高さを超えていたものと想像できる。金堂前面が重要な儀式の場となり、様々な法会が開かれていたことが実際の遺構から確認された例は全国的にも珍しい。



金堂前面発掘写真 平成4年(1992)

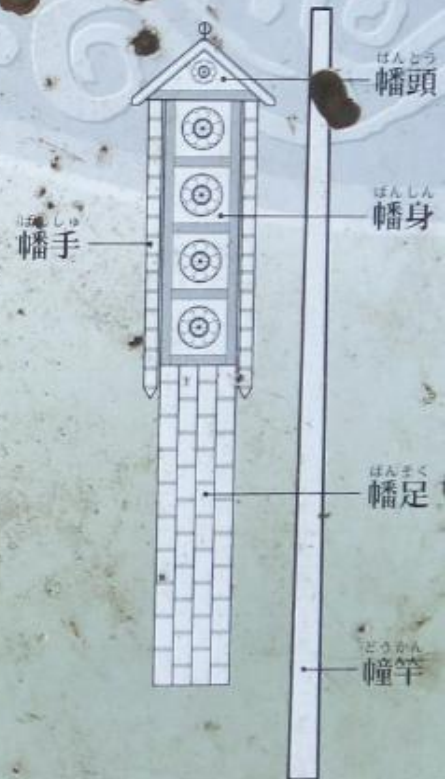
## 「<sup>ばん</sup>幡」

「幡」は「波多」(和名抄)と呼んでいたように、荘厳のため法要を行なう庭などに立てた高竿のほか、仏殿の柱や天蓋などにも懸ける。

材質は錦、綾、絹、麻布などで、正倉院宝物には染めや刺繍などを施したあらゆる種類のものがある。色は赤、黄、緑、紺、紫などを重ねた色鮮やかなものが多い。

その形は人形を模したような三角形の幡頭に、細長い幡身が連なる。幡身はいくつかの坪に区分けし、左右に2本ずつの幡手がつき、幡身の下に数本の細長い幡足を垂らす。

東大寺における天平宝字元年(757)の聖武天皇一周忌齋会に用いられた6坪の幡身の長さが6.4mにもなる大型の幡や5m前後の小型幡が正倉院に多く伝わる。



金堂跡









# 金堂跡

仏殿。本尊をおまつりする堂で、尼寺伽藍の中心にある最も大きな瓦葺建物。屋根の大きさに築かれた高さ1mほどの基壇上に建てられた。

僧寺と同じと推定される河原石による乱石積基壇らんせきつききだんや雨落石敷あまおちいしじき、階段などの痕跡は一切残っていないが、かろうじて残存していた基壇掘り込み部ほんらて(版築土)の規模と地上部の規模をほぼ同じと考えて東西26.7m(90尺)、南北(62尺)18.5mと復元した。

その上で金堂外側の柱より基壇の縁までの距離を約3m(10尺)と仮定して建物規模を正面間口20.76m(70尺)、奥行12.56m(42尺)と推定し、土質舗装範囲で表示した。

外観は、屋根を寄棟造、正面間口の柱間を7間として想定した。正面中央5間と背面中央は両開きの板扉。正面両端間と側面・背面の一部は窓、その他は土壁。このため金堂内部には薄明かりがさし、扉がしまっても真っ暗ではなかったと推察される。

広い堂内中央には須弥壇じゆみだんが据えられ、丈六の阿弥陀三尊像あみださんぞうなどの仏像が安置されていた。



金堂外観イメージ



金堂基壇上空からの発掘写真 平成4年(1992)



東から金堂跡を見る



金堂基壇上から東を見る





金堂基壇上から南(中門方向)を見る



金堂基壇上から北(講堂・尼坊方向)を見る





金堂基壇上から西を見る



中門跡







# 中門跡

中枢部区画南面の軸線上に設けられた門。金堂中心から約49m南に位置する。基壇の上部は礎石ごと失われ、約0.3～0.4mの基礎掘り込み部(版築土)がかろうじて残っていた。東西12.5m(42尺)、北推定9.6m(32.5尺)。掘り込み部北縁から0.9m離れて並ぶ小柱穴4個(SA20)は、中門建設時の足場穴と考えられる。中門外側の柱より基壇の縁までの距離を金堂の半分ほどと仮定すると、中門規模は間口(東西)9.8m(33尺)、奥行6.8m(23尺)程度の三間一戸の八脚門と推定され、現地では基壇上にレンガで表示している。古期南面塀に伴う創建当初の中門は一間一戸程度の小規模な門であったと推察され、南面塀の延長にあたる西妻の基壇下で確認された柱穴規模が大きいので、これを現柱とする棟門であった可能性もある。



中門付近発掘写真 平成5年(1993)

想定される創建当初の中門中心と尼坊中心とを結ぶ中軸線は、南面を除く中枢部区画塀・溝と尼坊とに合致する。これに対して、建替え後の中門中心と金堂中心・尼坊中心とを結ぶ中軸線は、中枢部区画南面塀・溝と金堂とに合致する。この方向のずれは、当初の中枢部区画南面施設の設定から生じており、最終工程において急ぎ工事を進めたことが原因の一つと推察される。



中門外観イメージ図

三角形のコンクリート部分が中門跡





中門に取りつく掘立柱塼の位置を植栽で表している





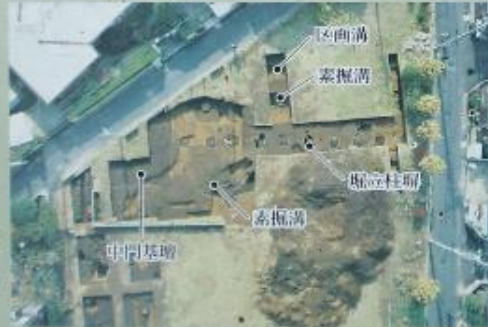
# 尼寺跡中枢部南辺の 区画施設跡

尼寺伽藍地(寺域)内の中枢部には金堂、講堂(未発見)、鐘楼(未発見)、経蔵(未発見)、尼坊などの主要建物が配置され、中門に取りつく掘立柱扉と並行する素掘溝で長方形に区画される。規模は東西89.1m(300尺)、南北118.8m(400尺)と推定される。回廊を設けず尼坊までを開む特異な配置は僧寺と同じである。

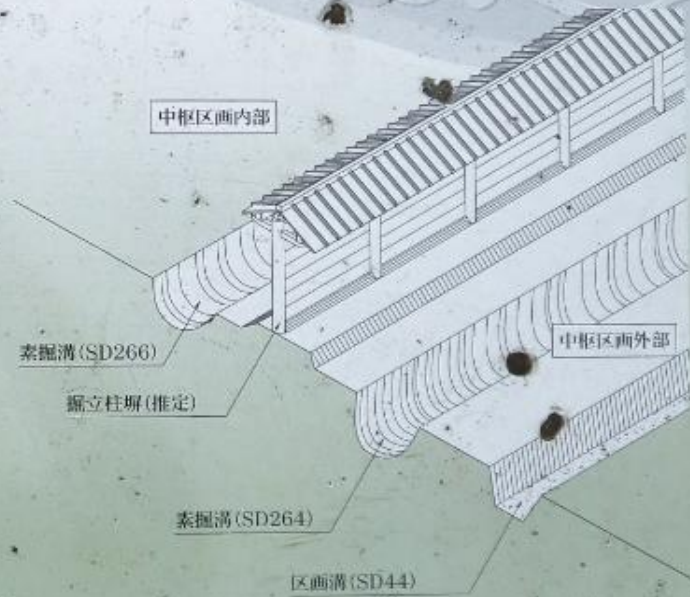
南面扉(SA18)は掘立柱扉で、柱間は2.4m(8尺)、柱径25cm。柱穴掘方は一辺0.9~1.2mの長方形で中門の西側9間分を確認した。土堀か板堀か、あるいは瓦を葺いていたどうかは不明である。

区画溝(SD44)は扉より6.7m離れて掘られている。上面幅1.6m、底面幅1m、深さ0.8mで、伽藍地(寺域)区画溝よりやや小規模である。

扉に近い内側(SD266)と外側(SD264)の溝は、扉に直接伴うものでなく、中枢部内建物の基礎工事に伴う土を採取した跡の可能性が大きい。



中門地区上空からの発掘写真 平成4年(1992)



中枢部区画施設の構造



この砂利部分は堀内側の素掘り跡







塀外側の素掘り跡(右手)と左手の砂利部分は区画溝



この砂利部分は堀内側の素掘り跡





塀外側の素掘り跡(左手)と右手の砂利部分は区画溝



塀外側の素掘り跡





正面は武蔵国分尼寺跡の史跡標柱









正面は武蔵国分尼寺跡の記念碑と出土した礎石









出土礎石





## 出土礎石<sup>そ せき</sup>

ここに展示してある3個の大きな石は、整備に先立つ確認調査の際に出土したもので、尼寺の金堂など主要建物の礎石に用いられていた石と考えられる。最も大きなもの(重さ700kg)は中樞部区画東面堀近くの中世遺構(SX114地下式横穴)よりの出土。残る2個は金堂基壇南東隅近くの表土より出土。石材は3個ともチャートで、僧寺金堂や講堂・七重塔に残る当時の礎石と同じで、おそらく尼寺の造営にあたり奥多摩で採取し運搬してきたものであろう。

中門跡左から金堂跡、尼坊跡方向を見る





次の国分寺市文化財資料展示室へ向かう途中に振り返る/正面の道路を進み、武蔵野線の線路をくぐると武蔵国分尼寺一帯が広がる







国分寺市文化財資料展示室へ歩く途中に振り返る/正面の小山部分は伝祥応寺や塚、そして旧鎌倉街道がある一帯/その左手が武蔵国分尼寺部分



参考ホームページ

<http://www.aswe.jp/shashi/histry/bibo/030504MUSA-KOKUBUN-NIJI/>

国分寺市文化財資料展示室







# 中世の国分寺

式部国分寺遺跡



遺構跡



遺構跡



出土品





こい け くぼ ぼい し あと  
恋ヶ窪廃寺跡



西園分寺跡南東90mの泉町三丁目33番一帯にあります。  
古瓦や磁磚の出土によって江戸時代末期には顕著の注目するところとなっていました。府中街道脇の林として長い間保存されてきました。  
昭和46年の西園分寺釈迦會禮殿の前庭から開発の途にされ、現在遺跡の大半はどろの下になっています。

昭和46年から昭和63年まで6次にわたる調査の結果、礎石建物跡1棟・孤立柱建物跡0棟・礎跡5棟の他、土壇基12基・火葬基6基など古代から中世にかかる遺構が多数発見され、大きく3期の定礎がとらえられる寺址跡であることが判明しています。



【礎石建物跡全景】

遺跡の範囲は道路や鉄道などのため明らかになっていません。

出土品には、磁磚や宝篋印塔など中世の供養塔や瓦葺屋根・古銭などがあります。

でん しょう おう し あと  
伝祥応寺跡



本跡は尼寺伽藍の一部とする説もありましたが、近年の調査によって、鎌倉時代末頃に建てられた寺跡と判明し、本多四丁目の祥応寺の前身にあたと考えられています。

旧鎌倉街道と重なる切り通しに東面して、土壇(基礎部幅3m、高さ3.2m以上)と溝とで東西30m、南北45mの長方形の区画が形づくられています。残存する大小15個の礎石の分布などから、東西9m、南北18mほどの規模の堂がその中央にあり、互を囲まない建物だったと推定されています。

出土品には鉄製風鐸、磁磚、銭貨などがあります。



【板碑出土状態】



【伝祥応寺跡全景】

次の武蔵国分寺跡資料館へ歩く途上、武蔵国分寺の講堂跡の発掘調査が行われていた/手前は金堂跡部分













このように調査はコツコツと進んでいる



武蔵国分寺跡資料館入口に到着





この長屋門は文化財となっている

登録有形文化財

## 「旧本多家住宅長屋門」


2013年9月10日登録 登録番号第13-0266号

名称	旧本多家住宅長屋門
所在地	東京都国分寺市西元町1-1574-1
年代	弘化5年(1848)
登録基準	一 国土の歴史的景観に寄与しているもの
特徴・評価	敷地の南端、T字路の突きあたりに建つ。桁行15m梁間4.5mの木造2階建、東西棟の寄棟造鉄板葺。1階は下見板張、2階は漆喰仕上げとする。中央を門口とし、両開戸と潜り戸を吊り、東側に座敷、西側に物置を配する。名主の風格を留める長屋門である。
備考(調査等)	建築年代は文書による。

旧国分寺村の名主家の門。建築の注文書が残っており当初の規模などが分かります。1階東側に2間の座敷が設えられ、隠居などの居室として使用することが想定されたのではないかと思います。事実、幕末の慶応元年(1865)から名主家の息子である医師本多雅軒が一時期ここで開業していました。

長屋門とは門の形式のひとつです。近世の大名・旗本などが家臣の居所として長屋と門を結合して建築したものです。民家の場合は長屋部分を物置などに使用していました。近世では、村役人または名字帯刀を許された家の門形式として公に許されていました。

武蔵国分寺跡資料館



登録有形文化財  
第13-0265~0266号  
この建造物は貴重な国民的財産です  
文化庁

内部の庭園





長屋門を庭園内から見る















こんなのもありました





この住宅倉も文化財となっている





登録有形文化財

# 「日本多家住宅倉」

平成22年9月10日登録

登録番号第13-0265号

名称	日本多家住宅倉
所在地	東京都国分寺市西元町1-1574-1
年代	明治33年/昭和8年改修
登録基準	一 国土の歴史的景観に寄与しているもの
特徴・評価	敷地の西側に位置する、 <small>桁行</small> 4.5m、 <small>梁間</small> 3.6mの木造2階建、 <small>切妻造</small> 鉄板葺の置屋根とすき、 <small>妻流し</small> の入口、2階の東西妻面に開口を穿つ。内壁が <small>張出し</small> 、外壁は <small>改修</small> で目地を切るモルタル洗出しとする。時代の流しを反映した近代的な倉である。
備考（調査等）	建築年代等は棟木銘による。

倉2階の棟木に「維時宝永五年創建 明治三十三年十二月三世本多良助全部新造（略）」という墨書があり、江戸時代中期の宝永5年（1708）に建った倉を明治33年（1900）に新築したという経緯が分かります。

現在の目地を切ったモルタル洗い出しの外壁は、都立殿ヶ谷戸庭園内の同年代建築の蔵と似ており、同時代の流行を示しています。

聞き取り調査で、家財道具などを収納していたことが分かります。



棟木の墨書

東京都国分寺市立資料館





この辺りは湧水が豊富という











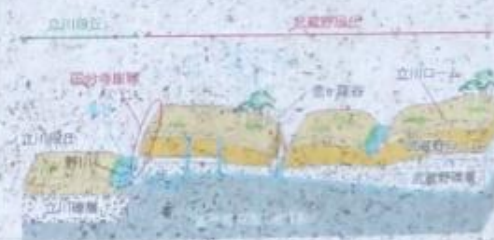
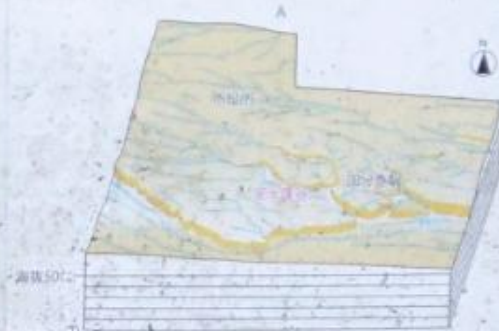


国分寺市から世田谷区まで続く武蔵野段丘南側の国分寺崖線は、古多摩川の流路によってつくられた地形で、通称「ハケ」と呼ばれています。関東ローム層の下には砂利の混ざっている武蔵野礫層があり、台地に降った水が地下水として流れています。国分寺崖線の下では、この礫層が地表にあらわれている場所があり、ここから水が湧き出しています。真姿の池湧水群を含めたこの付近の湧水は野川の最源流となっています。



## 湧水源観察ポイント

湧水源はこの先約9mの場所です



国分寺市の地形と湧水



前方が湧水源





武蔵国分寺跡資料館







国指定史跡

武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡

8世紀中頃（奈良時代）、国内では相次いで飢饉や干害、大地震による災害、疫病が流行して、人々は苦しんでいました。政治を行っていた朝廷でも、中心的な役割を果たしていた藤原四兄弟が疫病で亡くなり、大宰府（福岡県）では反乱が起こるなど、混乱が続いていました。

天平13年（741）、聖武天皇は、仏教の力で国を安定させ、人々を苦しみから解放するために、諸国に国分寺（僧寺：金光明四天王護国之寺と尼寺：法華滅罪之寺）を建立するように命じました。

武蔵国では、国府（現：府中市）に近く、都へ通じる東山道武蔵路沿いの湧水が豊富な、国分寺度線の麓一帯に、国分寺が置かれました。国分寺市の名前は、古代に国分寺が置かれたことに由来しています。

武蔵国分寺跡は、全国に建てられた国分寺の中でも規模が大きく、歴史的にも重要なことから大正11年に国史跡に指定されました。平成22年には、東山道武蔵路も追加指定され、史跡名称が「武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡」に変わり、約146,200㎡の広大な史跡となりました。

国分寺市では、郷土の歴史を語り継ぐよりどころであり、豊かな自然環境を残す場として、広く親しまれてきた武蔵国分寺跡の保存と整備・活用に取り組んでいます。



武蔵国分僧寺イメージ図

武蔵国分寺跡資料館ご利用案内

- 観覧時間  
午前9時～午後5時（入館は午後4時45分まで）
- 休館日  
毎週月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）  
年末年始（12月29日から1月3日まで）  
臨時休館することがあります。
- 入館料  
資料館に入館するには「おたかの湧流水園」への入館料が必要になります。（入館券は史跡の駅で販売）  
一般……………100円（年間パスポート1000円）  
中学生以下……………無料  
（入館料の減免規制があります）  
① 学校の教育活動で生徒（中学生を除く）、学生及び引率の教職員が入館するとき（事前（7日前まで）に減免申請書の提出が必要です。）  
② 身体障害者及びその介護者が入館するとき（障害窓口の史跡の駅で身体障害者手帳等の提示が必要です。）  
③ その他教職員が特別の理由があると認めるとき（事前（7日前まで）に減免申請書の提出が必要です。）  
※減免申請書は、国分寺市のホームページからダウンロードできます。



- 交通のご案内  
電車①国分寺駅下車／徒歩約20分 ②西国分寺駅下車／徒歩約15分  
バス①国分寺市循環バス「ふん/ふ」自由町ルート「国分一丁目」下車／徒歩約8分  
②国分寺駅南口より「京王バス」系統番号「460」・（465）乗車「国分一丁目」下車／徒歩約5分

武蔵国分寺跡資料館  
TEL 042-323-4103 FAX 042-300-0091  
E-mail: musasimcity.kokubonji@tokyo.jp  
HPアドレス:  
http://www.city.kokubonji.tokyo.jp/setsu/1731/000819.html



見る 学ぶ 訪ねる  
武蔵国分寺跡  
資料館

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

天平のとびらを聞く





## 発掘調査成果と史跡の重要性を伝える

武蔵国分寺の遺跡は、僧寺と尼寺のほかに、関連する住居跡などを含めると東西 1.5 km、南北 1.0 km と広大な範囲におよびます。昭和 31 年から史跡の発掘調査が行われ、これまでに多くのことが明らかになりました。

武蔵国分寺跡資料館は、このような長年の発掘調査の成果をもとに、主に出土した資料を展示して、武蔵国分寺跡や史跡の整備事業の進行状況、今後の計画などを紹介しています。

## コンセプト

武蔵国分寺跡資料館は、展示資料を「見る」、「学ぶ」そして、実際に史跡を「訪ねる」の 3 つをキーワードにしています。

資料館が史跡にある利点を活かして、展示を見て感じ、学んだことを現地で体感し、より武蔵国分寺跡への理解を深めていただくことを目標に活動しています。



武蔵国分寺跡全体図

## 武蔵国分寺

展示室 1



銅瓦「寺」瓦葺書

青銅土器「国寺」

桶の金銅製銚金具



武蔵国分寺跡定礎元模型



学習コーナー

資料室

収蔵庫

受付

展示準備室

スロープ入口

受付

正面入口

講堂室  
(企画展示室)



鉄製農具

## 武蔵国分寺の瓦

展示室 3



新羅朝の軒瓦

瓦

郡名文字瓦

郡名・人名文字瓦

## 国分寺市の文化財

展示室 2

旧石器時代から江戸時代までの  
おもな文化財を展示しています。



硝玉製大珠  
(縄文時代)

緑釉花文瓦  
(平安時代)



銅造観世音菩薩立像  
(白鳳時代後期)



紙) 南軍家寺領安地高印状  
(江戸時代)

武蔵国分寺跡資料館は、先人の残してくれた貴重な文化遺産を守り、後世へ受け継いでいくために活動しています。



イメージキャラクター  
朝日華姫

最後はここ僧寺北東地域の調査です





# し せき むさし こく ぶん じ あと そう じ ほく どう ち いき 史跡武蔵国分寺跡(僧寺北東地域)

奈良時代中頃、聖武天皇は仏の力で国を安定させるために、諸国に国分寺の建立を命じた。武蔵国では、都と国府（現府中市内）を結ぶ古代官道「東山道武蔵路」沿いの東に僧寺、西に尼寺が計画的に配置された。この地域は、僧寺伽藍地区画内の北東部にあたる。金堂や七重塔など往時の堂塔は、国府に向かって南面し、その背後には、緑あふれる国分寺崖線（ハケ）が横たわり、ふもとからは、随所に清らかな湧水が流れ出て、今も絶えることがない。近年、当地において大型開発が計画された折に、市民による水と緑と文化財の保全を求める運動がおり、関係者の努力が実って、この区域が保全された。

- ◆指定種別及び名称 国指定史跡 武蔵国分寺跡
- ◆指定年月日 大正11年10月12日
- ◆追加指定 昭和51年12月22日、昭和54年5月14日、昭和57年7月3日、平成10年12月25日、平成14年12月19日、平成17年3月2日、平成17年7月14日、平成18年7月28日

## 僧寺北東地域周辺の関連遺構

この場所から北東にあたる寺院地区画の外側において、8世紀後半～9世紀初頭の竪穴住居跡が発見され、僧寺の創建に関連する集落が存在していたと考えられている。また広く北辺溝の周辺から10世紀後半～11世紀初頭の竪穴住居跡が多数発見されている。この時期には集落が寺院地の内側にまで大きく進出して、区画溝は埋没し、区画の意義も失われて、国分寺の権威が衰退に向かっていったことがわかる。



## こく ぶん じ がい せん けう すい ぐん 国分寺崖線と湧水群

国分寺崖線は、今から7万年～3万年前にかけて多摩川が武蔵野台地を侵食することにより作られた河岸段丘の連なりの通称である。その延長は約30kmに及び、立川市から大田区まで続いている。崖線には湧水などの貴重な自然、里山として利用されてきた樹林などが多く残されており、地域の原風景ともいべき景観を形成している。このうち、崖下の「真姿の池湧水群」は、東京都の名勝に指定され、環境省の名水百選に選ばれている。

平成20年4月 国分寺市教育委員会





加藍地北辺の区画溝跡









# 伽藍地(寺院地)北辺の区画溝跡



この溝は、金堂、講堂、七重塔などの主要建物が置かれた僧寺伽藍地の北限境界であり、南側では伽藍中軸線上において南大門(未確認)につながっている。

関東地方の国分寺に特徴的な素堀の溝で、幅2.1~3.0m、深さ0.8~1.2mとなっている。寺の管理運営施設を含んだ外側の区画である寺院地の北限の役割もあわせもっている。

当施設は、旧建物基礎などによる溝道構の滅失範囲を利用して、地下に埋没した溝の様子を観察していただくことを目的に設置した。ここに復元した溝断面は、平成14年度の現都立武蔵国分寺公園内の発掘調査において採取された北辺溝道構の削ぎ取り標本(土層断面標本)を元に作成した。遺構が検出された高さに展示してある。



この辺りは僧寺北東地域









奈良時代中頃、聖武天皇は仏教の力で国を安定させるために、諸国に国分寺の建立を命じました。武蔵国では、都と国府（現府中市内）を結ぶ古代官道「東山道武蔵路」沿いの東に僧寺、西に尼寺が計画的に配置されました。武蔵国分寺跡は、全国の国分寺跡と比べても規模が大きく、歴史的な重要性が広く認められており、大正11年に国指定史跡に指定されています。

国分寺市では、郷土の歴史を語り継ぐよりどころであり、豊かな自然を残す場として広く親しまれてきた武蔵国分寺跡を、歴史公園として整備・活用するための事業を進めています。

◆指定種別及び名称

国指定史跡

武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡

◆指定年月日

大正11年10月12日

◆追加指定

昭和51年12月22日、昭和54年5月14日、昭和57年7月3日、平成10年12月25日、平成14年12月19日、平成17年3月2日、平成17年7月14日、平成18年7月28日、平成22年8月5日（東山道武蔵路跡が附で追加指定）



## 僧寺跡の第一期整備が始まります。

「史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）整備実施計画」（平成21年2月）に基づき、金堂跡、講堂跡、鐘楼跡を含む中枢地区の第一期整備について基本設計が平成23年5月にまとまりました。平成23年度末より整備工事に着手します。

### 遺構表示

#### 金堂跡

河原石積基壇外装カハシイシツキキダンガイサウによる基壇を復元。基壇上面は埴敷ハシ。  
オリジナル礎石は、露出して維持。新補石を想定位置に設置。  
雨落石敷、南北階段を表示。

#### 講堂跡

瓦積基壇外装カワシキキダンガイサウによる基壇を復元。基壇上面は芝張り。  
オリジナル礎石は、露出して維持。新補石を想定位置に設置。  
雨落石敷、南北階段を表示。

#### 鐘楼跡

基壇範囲を平面表示。オリジナル礎石は、露出して維持。



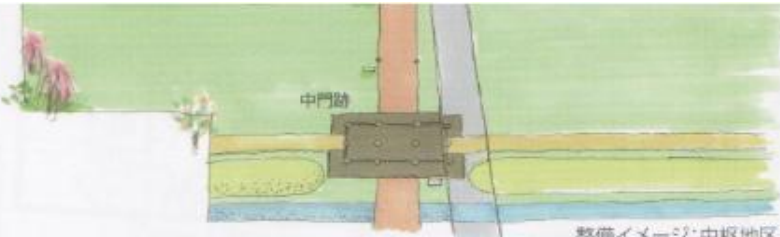


新補石を想定位置に設置。

### 中門跡

基壇範囲を平面表示。礎石は、新補石を想定位置に設置。

※既存道路にかかる部分を除く。



整備イメージ:中樞地区鳥瞰図



整備イメージ:北側入口

## 環境整備

### 北側からの視認性の確保

既存石垣を撤去し、必要最低限の高さまで下げる。

### 北側入口の拡幅整備

入口を拡幅し、スロープを設置する。

### 遺跡にふさわしい植栽環境

遺構の保存に支障をきたす樹木は伐採する。

### 解説・便益施設

わかりやすい解説施設の設置。照明・ベンチなどの設置。

## 工事の実施

整備工事の実施は、平成23年度から26年度へかけての4ヵ年を想定しています。平成23年度末に北側の石垣撤去から着手し、順次、講堂→金堂→鐘楼→中門の順に工事を進めていきます。中樞地区の整備が終了次第、南門地区、塔地区についても、整備実施計画に基づき、整備を進めていきます。工事中は、ご不便をおかけいたしますが、みなさんのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



整備イメージ:中門跡より北を望む

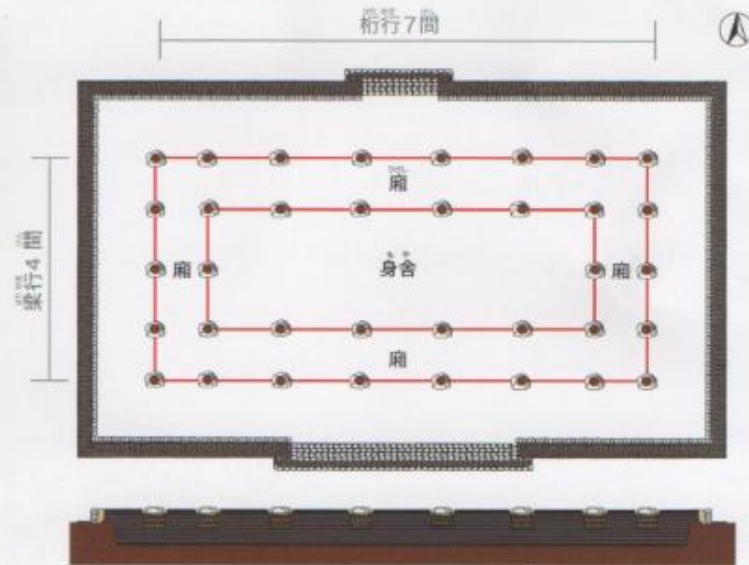


## 金堂跡の調査 — 諸国国分寺中最大級の規模 —

金堂は本尊仏を安置する重要な建物です。現在は、基壇の高まりとともに19個の礎石が往時のまま残っています。発掘調査の結果、武蔵国分寺の金堂は、全国の国分寺と比べて最大級の規模であることが確認されました。



武蔵国分寺推定復元模型(武蔵国分寺跡資料館蔵)より金堂写真



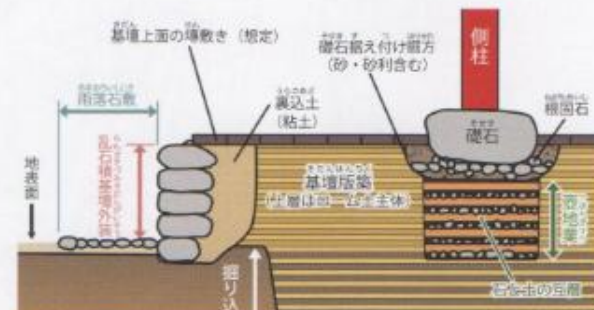
金堂基壇・建物平面模式図および基壇断面模式図

### 建物

桁行7間(東西約36.1m)、梁行4間(南北約16.6m)の四面廂建物。軒の出は、16~17尺と推定され、組み物を多用した大きな屋根がかかっていたと考えられます。

### 基壇

版築工法により築かれ、外装は河原石による乱石積基壇外装。規模は東西約45.4m、南北約26.2m。外装の周囲には雨落石敷がめぐります。高さは北東





部分で約0.95m,北面中央で約0.8m,東面で約1.25mと場所により異なります。

### 階段

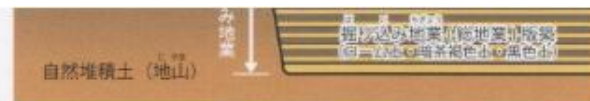
北面階段は乱石積。幅は建物中央間1間分,階段の出は約1.35m。南面階段は幅がおおよそ建物中央間3間分であることが判明しましたが,その大半が市道上に位置し未調査となっています。

### 基礎

建物規模より広い範囲全体におよび掘り込み地業(版築)が行われています。深さは約1.3m。さらに礎石を据え置いた下には壘地業を施しており,極めて堅固な基礎工事となっています。

### 補修

建物や基壇の増築痕跡は認められませんでした。出土した宇瓦(9世紀中頃以降)に,建物に塗る朱が付着しており,補修状況がうかがえます。



建物基礎断面模式図



基壇・掘り込み地業断面(西から)



金堂跡出土宇瓦(頸部朱付着)



基壇北面階段(北から)



基壇外装北東隅(北東から)

武蔵国分寺跡の全体像や,建物等の規模・構造を明らかにし,整備によって復元・表示するために,今後も発掘調査を継続していきます。

なお,僧寺(武蔵国分寺)については既報告の「武蔵国分寺跡」をご覧ください。